

# 新生児科

## (スタッフ)

部長（第一新生児科）：飯田 浩一  
 （総合周産期母子医療センター所長兼任）  
 部長（第二新生児科）：赤石 睦美  
 副部長：米本 大貴  
 ：慶田 裕美  
 主任医師：中嶋 美咲  
 医師：山本 大貴  
 嘱託医：檜崎 健太郎  
 ：川上 勲（10月から）  
 ：春日井 悠  
 （4月から7月まで）  
 ：市地 さくら  
 （4月から9月まで）  
 専攻医：平原 慎之介（10月から）  
 ：明 祐也（12月から）  
 ：矢野 文子（12月から）  
 ：坂倉 光  
 （8月から11月まで）  
 ：大賀 慎也（7月まで）  
 ：山下 もも  
 （8月から11月まで）  
 ：木下 湧暉  
 （4月から9月まで）  
 ：甲斐 陽一郎（3月まで）

2022年12月末現在、11名体制です。飯田から中嶋までは周産期（新生児）専門医を取得しています。

## (診療実績)

2022年では総入院数は2021年より増加しました。主に体重の大きい児の入院数が増加しており、出生体重1,500g未満の児は逆に減少しました。表1に出生体重別入院数を昨年と対比させて記載します。総合周産期母子医療センター新生児病棟に入院した全ての児（新生児科、小児外科、他科を含む）で、再入院した児は除いています。

出生体重1,500g未満の児は全員救命できました。死亡は2名で、どちらも救命困難な児でした。

2022年の特徴は新型コロナウイルス感染の母から出生した児が30人入院したことです。出生後まず小児病棟の陰圧個室に入院、48時間後に陰性確認し新生児病棟に転棟する形となりました。また、患者家族やスタッフにも陽性者がでたため、何名かの児は濃厚接触者扱いで病棟内隔離を必要とすることがありました。どちらも医師・看護師ともに人手を割か

れるため病棟運営には多大な影響が出ました。幸い新生児は一人も陽性とならずに済みました。

図に過去10年の経年変化を示します。出生数の減少に伴い、体重が非常に小さい極低出生体重児の入院数は減少しています。一方、入院数は微増の傾向で、人工呼吸器装着患者数は逆に増加する傾向にあります。死亡数は2022年は2名で、経年的に見ても減少傾向にあります。

表1 入院と転帰 ( )内：死亡数

出生体重 (g)	2021年	2022年
- 499	2(1)	1
500- 749	9	6
750- 999	4	3
1,000-1,499	18(1)	15
1,500-1,999	27	33
2,000-2,499	112	104
2,500-3,499	194	230(2)
3,500-	35	35
計	401(2)	427(2)

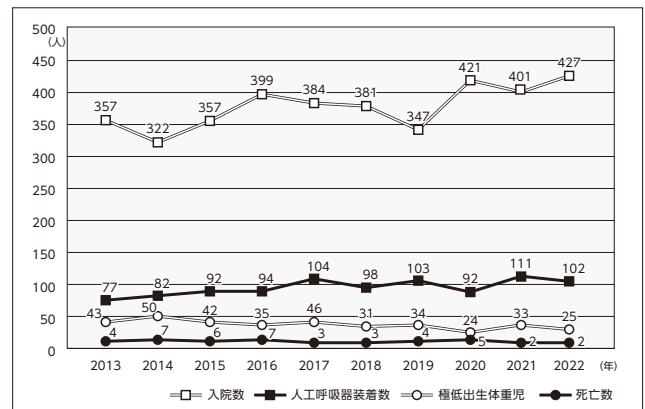


図 過去10年間の各指標の変遷

新生児専用ドクターカー（カンガルー号）出動件数は117件でした（表2）。開業産婦人科医院からの搬送は100件と昨年より増加しました。うち3件は出動依頼が重複して自治体救急車を利用してのドクター搬送となっています。2022年は自宅での墜落分娩が2件あり、救急隊のみでの搬送となりましたが、幸いにどちらも救命できました。当院が満床のためカンガルー号で迎えに行き他院へ搬送した三角搬送事例は2件でした。転院搬送が9件と減少しました。主に先天性心疾患の手術目的での県外搬送ですが、術後そのまま退院して大分県に戻ってくる例が多く、迎えに行くことはありませんでした。

表2 カンガルー号出動件数

	2021年	2022年
	出動(件)	出動(件)
搬送入院	86	100
三角搬送	2	2
県病から転院	18	9
県病に転院	10	0
立会いのみ	5	6
合計	121	117

出動した医療圏別の件数では大分市を主とした中部医療圏への出動が多いです(表3)。アルメイダ病院の周産期センターが閉鎖されて以降、2-3割出動件数が増加しています。県外への出動の減少は上記の理由と胎児診断がついた先天性心疾患のある胎児は母体紹介の形で手術可能な福岡県の病院で出産する事例が増えてきた影響もあると考えます。

表3 医療圏別の出動件数 (単位:件)

医療圏	2021年	2022年
中部	84	94
北部	1	1
東部	4	1
南部	5	9
豊肥	0	0
西部	4	5
県外	23	7

## (研修・教育)

新生児蘇生法講習会は2021年同様新型コロナウイルス感染の流行に伴いほとんど開催できませんでした。看護学生対象の2回と病棟看護師対象の1回のみで一次コース計29人の受講となりました。ここ2年間、助産師や救命士への新規の講習会や認定更新のためのスキルアップ講習会を開催することができておらず、現場での新生児蘇生のスキルの低下が危惧されます。2023年は新型コロナウイルス感染症も5類になる模様で通常開催に近づけていきたいと思ひます。

医学生教育も新型コロナウイルス感染流行のあおりを受けてほとんど中止となりました。例年、医学生には新生児の沐浴や哺乳など他ではなかなか体験できない実習を行い、好評を得ていましたので、流行収束の折には是非再開したいと思ひます。

研修医には健全な新生児から軽症の病的新生児までを中心に診てもらっています。当院の特徴として健全な新生児をたくさん診ることができる点があり、正常を知ることによって異常に気付けるように教育していきたいと思ひます。

## (今後の方向性)

大分県の出生率は都道府県別で10位以内に入るほ

どに高いですが、それでも出生数は年々減少しており、2022年は7,000人程度となっています。その中で入院を必要とする児は、当院と大分大学、別府医療センター、中津市民病院の4周産期センターに入院します。2020年にアルメイダ病院の周産期センターが閉鎖されベッドが足りなくなることが危惧されましたが、出生数の減少もあり、幸いにしてベッドが足りずに他県に搬送する事例は発生していません。今後も出生数の減少が予測され、この4施設で対応できると考えています。しかし、大分県では8割以上の出産が開業産婦人科で行われており、そこで生まれた治療を要する新生児を速やかに周産期センターに搬送し治療できるように4周産期センターで一層協力していきたいと思ひます。

2022年は、母児に影響するウイルス等の感染症が流行した際の当院の受け入れ体制の不十分さが浮き彫りになりました。新型コロナウイルス感染者が主に入院する三養院には分娩設備がなく、新生児病棟にも陰圧の隔離室がありません。手術室の陰圧室で分娩し、小児病棟の陰圧個室に入院させるといった通常とは非常に異なる形での受け入れとなりました。改善には施設改修を必要としますので簡単ではありませんが、今後検討が必要と考えます。

従来、アルメイダ病院が主に担っていた社会的ハイリスク妊婦(貧困やシングルマザーなど)の分娩が当院で増加しています。分娩だけでなく、その後の養育まで含めてサポートが必要で、虐待防止の観点から保健福祉センター、県市町村の母子保健担当、児童相談所などと連携をとりながら継続性のあるサポートを続けていきたいと思ひます。

NICU退院後の医療的ケア児へのサポートや大規模災害時への備えも同様です。当院だけの対応では不十分です。現場が家庭、地域となりますので、訪問診療・看護、行政との連携を密にして患者とその家族が孤立しないようにしていく必要があります。また、ケアする家族の負担を軽減するためにレスパイトの拡充を行っていきたいと思ひます。

当院は小児科専門医養成のための基幹施設となっています。若い先生たちにとって魅力ある周産期医療を提供できるように教育面を充実させていきたいと思ひます。

今後ともご指導のほどをお願い申し上げます。

### 【新生児科診察担当医】

月曜から金曜まで毎日行っています。

月	火	水	木	金
中嶋	飯田	森鼻	赤石	飯田
檜崎	森鼻	赤石	米本	米本

先天異常、発育発達の問題、育児不安など新生児・乳児期の発育発達全般に関して診療しています。必要があれば小児科、小児外科など他科との共同診療、または行政、福祉、学校などとの連携も行っています。  
(文責:飯田浩一)